

千葉県月例経済報告

(令和7年9月)

令和7年11月4日

千葉県商工労働部経済政策課

県内経済の基調判断

総合判断

前月からの判断変更 

県経済については、緩やかに持ち直している。

<個別判断>

個人消費

前月からの判断変更 

回復しつつある。

鉱工業生産

前月からの判断変更 

このところ横ばいとなっている。

住宅投資

前月からの判断変更 

弱含んでいる。

企業景況感

前月からの判断変更 

改善の動きに弱さがみられる。

設備投資

前月からの判断変更 

弱含んでいる。

雇用

前月からの判断変更 

持ち直しつつある。

公共投資

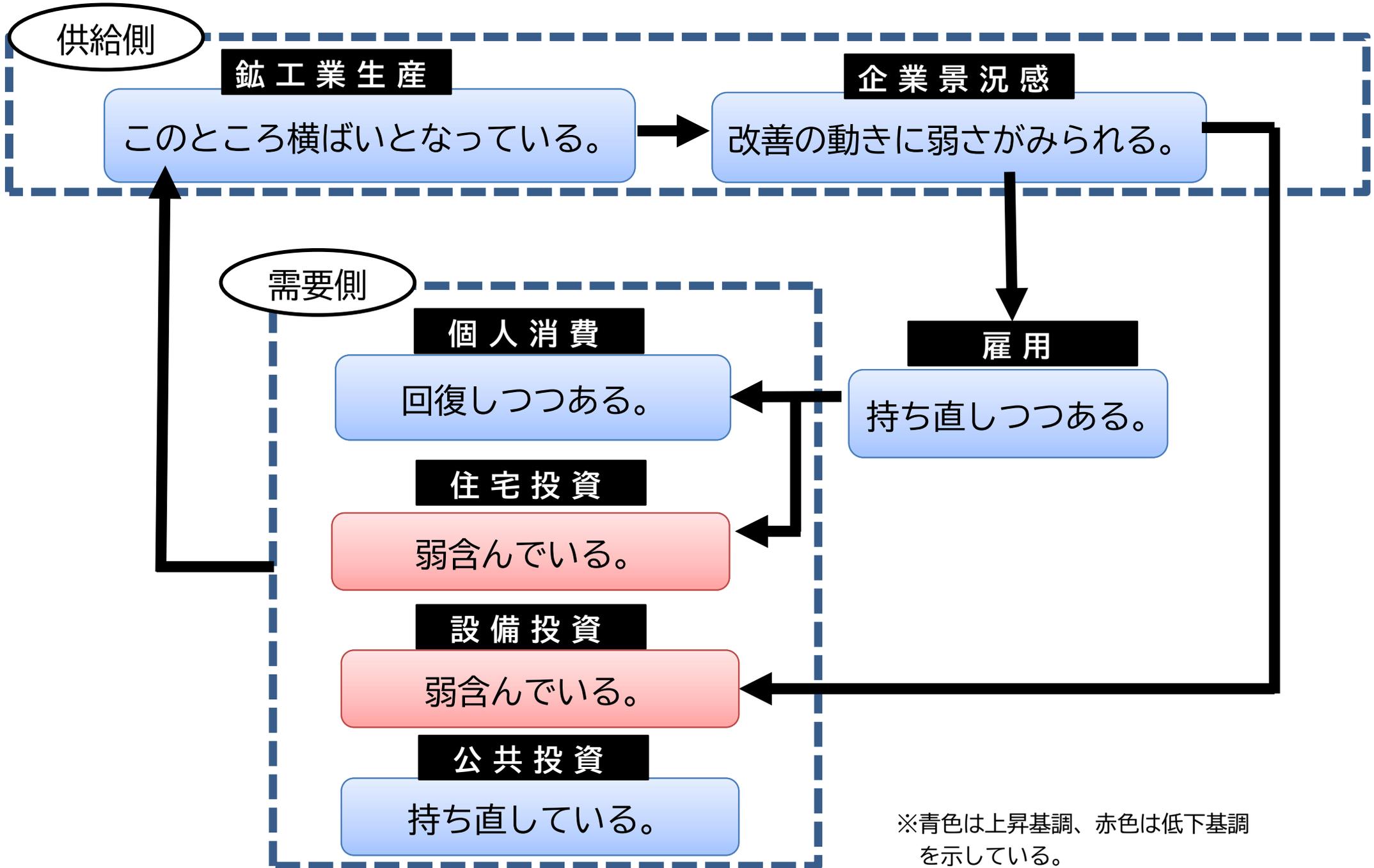
前月からの判断変更 

持ち直している。

消費者物価

上昇している。

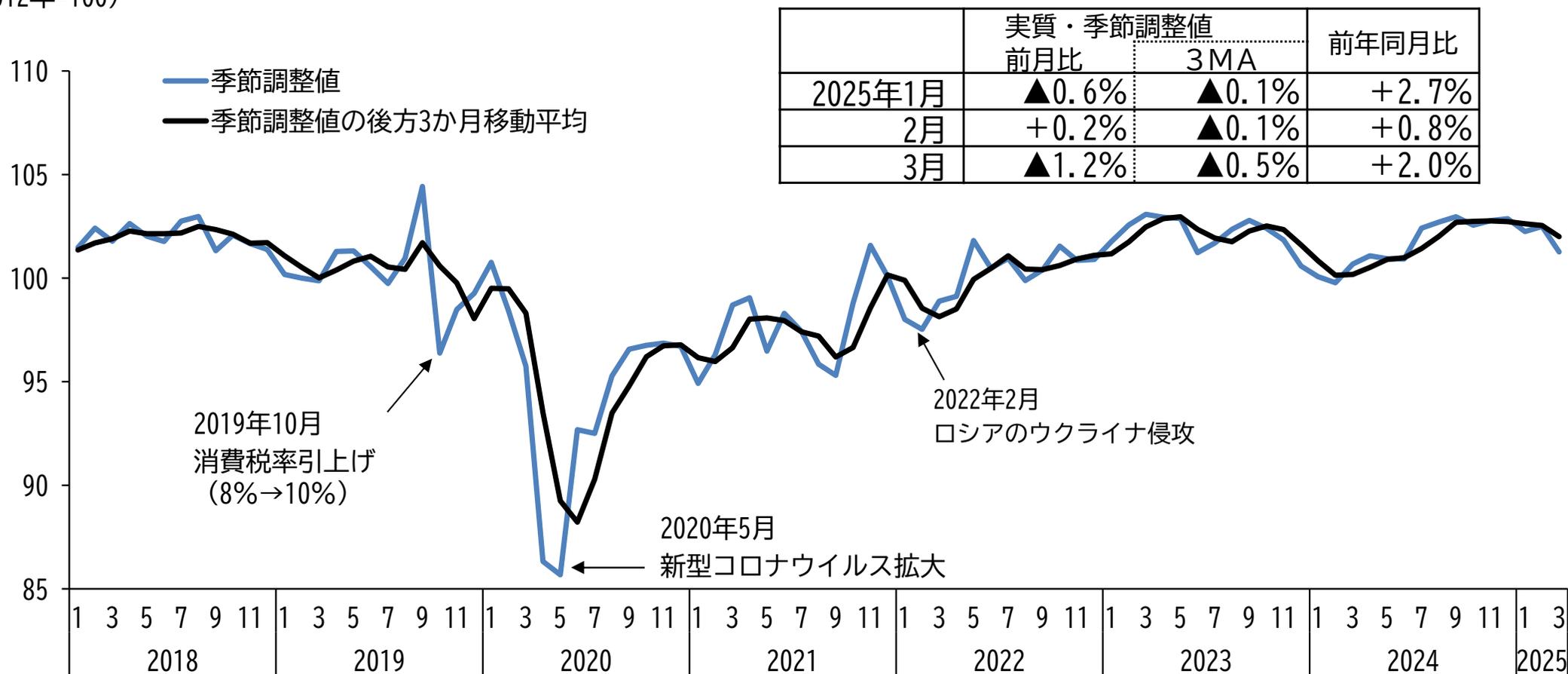
(参考) 景気の波及の流れ



□ 財およびサービスの消費を包括的に把握できる地域別消費総合指数について、3月は前月比▲1.2%、3か月移動平均は▲0.5%、前年同月比は+2.0%。

地域別消費総合指数（千葉県）（実質・季節調整値）

(2012年=100)



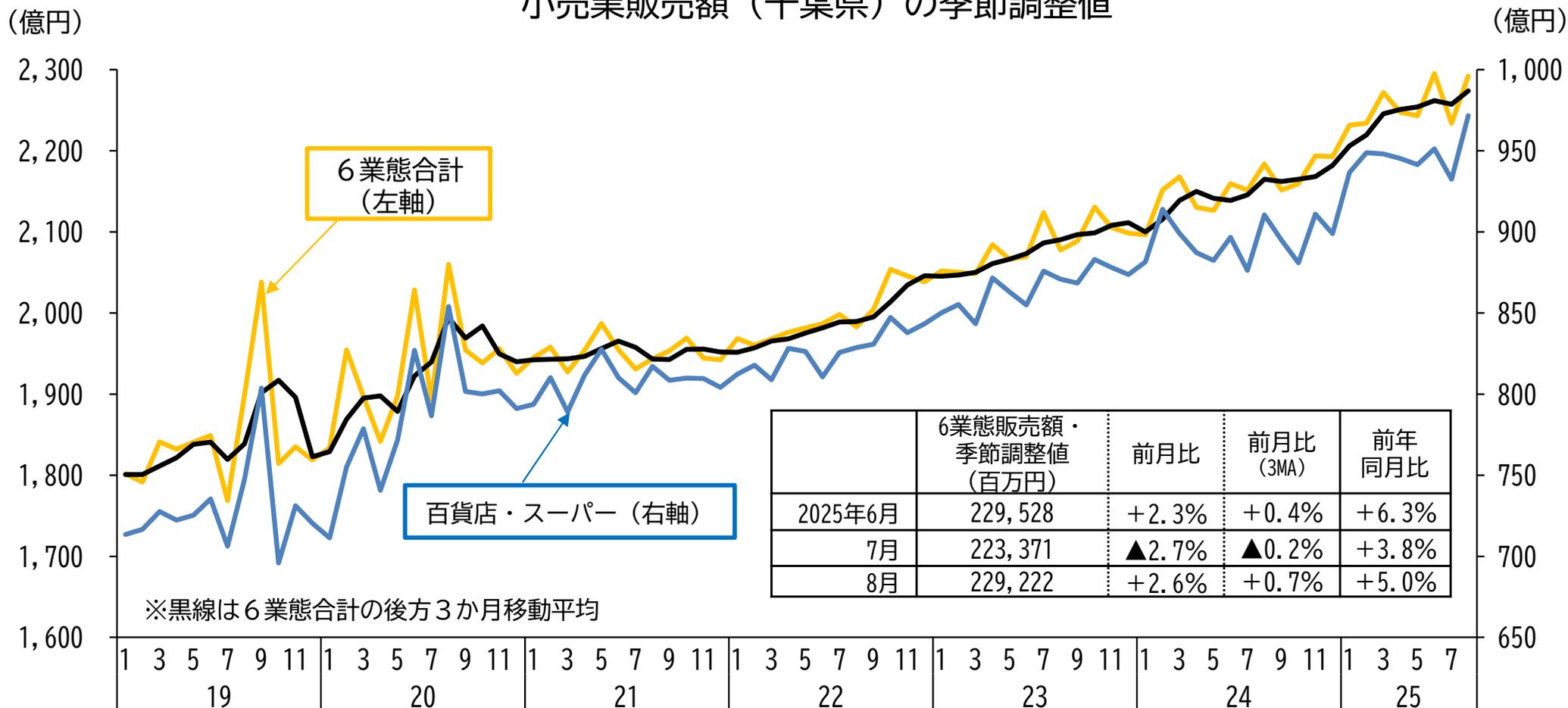
※3MAとは、後方3か月移動平均値。

(資料) 内閣府「地域別消費総合指数（令和7年7月28日公表）」

「商業動態統計」

□ 小売業販売額（6業態合計）について、8月は前月比+2.6%と増加。後方3か月移動平均は+0.7%と増加。前年同月比は+5.0%と増加。

小売業販売額（千葉県）の季節調整値



※黒線は6業態合計の後方3か月移動平均

※1 6業態とは、百貨店、スーパー、コンビニエンスストア、家電大型専門店、ドラッグストア、ホームセンターのこと。

※2 季節調整は、経済政策課作成。

※3 3MAとは、後方3か月移動平均値。

(資料) 経済産業省「商業動態統計」

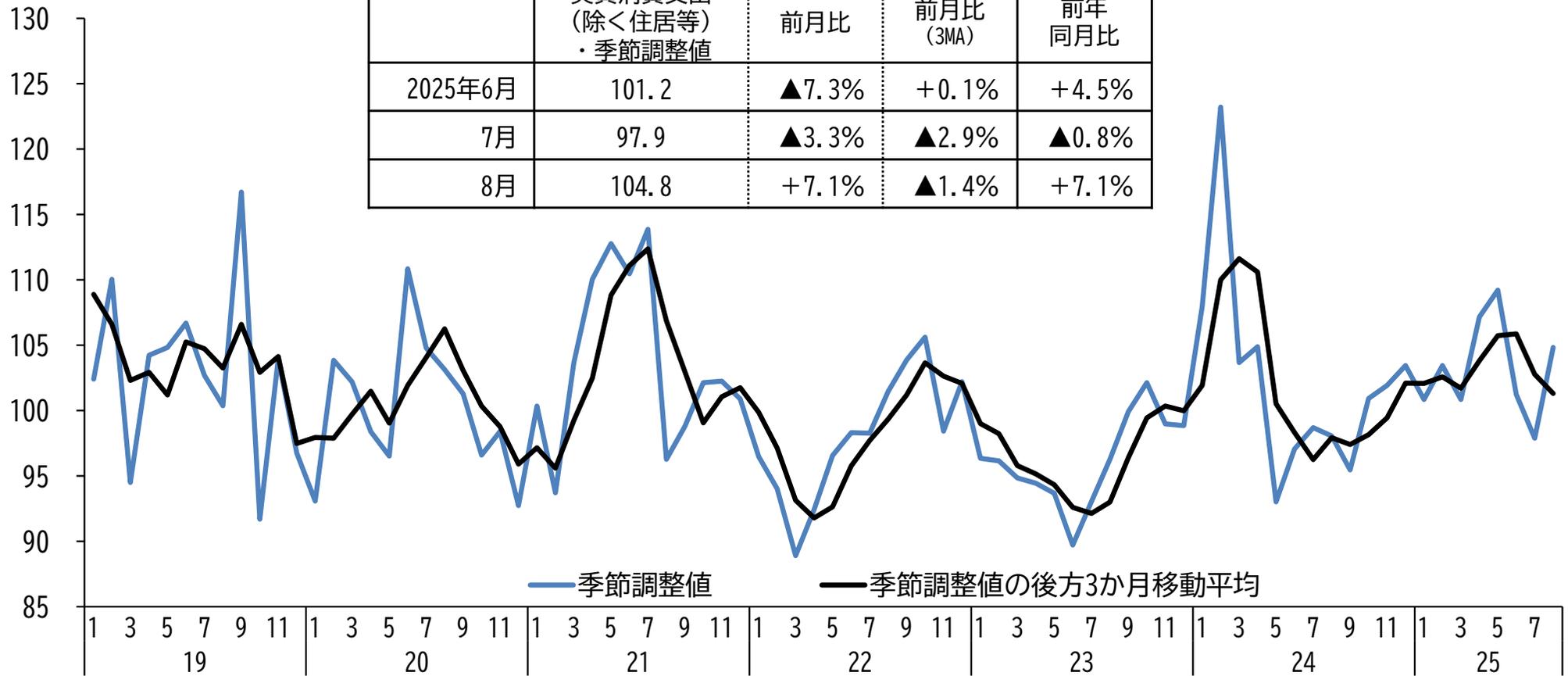
「家計調査」

- 実質消費支出（除く住居等）について、8月は前月比+7.1%と増加。後方3か月移動平均は同▲1.4%と減少。前年同月比は+7.1%と増加。

(2020年=100)

実質消費支出（除く住居等）（千葉市）の季節調整値

	実質消費支出 (除く住居等) ・季節調整値	前月比	前月比 (3MA)	前年 同月比
2025年6月	101.2	▲7.3%	+0.1%	+4.5%
7月	97.9	▲3.3%	▲2.9%	▲0.8%
8月	104.8	+7.1%	▲1.4%	+7.1%



※1 季節調整は、経済政策課作成。

※2 「住居」のほか、「自動車等購入」、「贈与金」、「仕送り金」を除いている。

※3 実質消費支出（除く住居等）= 名目消費支出（除く住居等） ÷ （消費者物価指数「持ち家の帰属家賃を除く総合（2020年=100）」×100）。

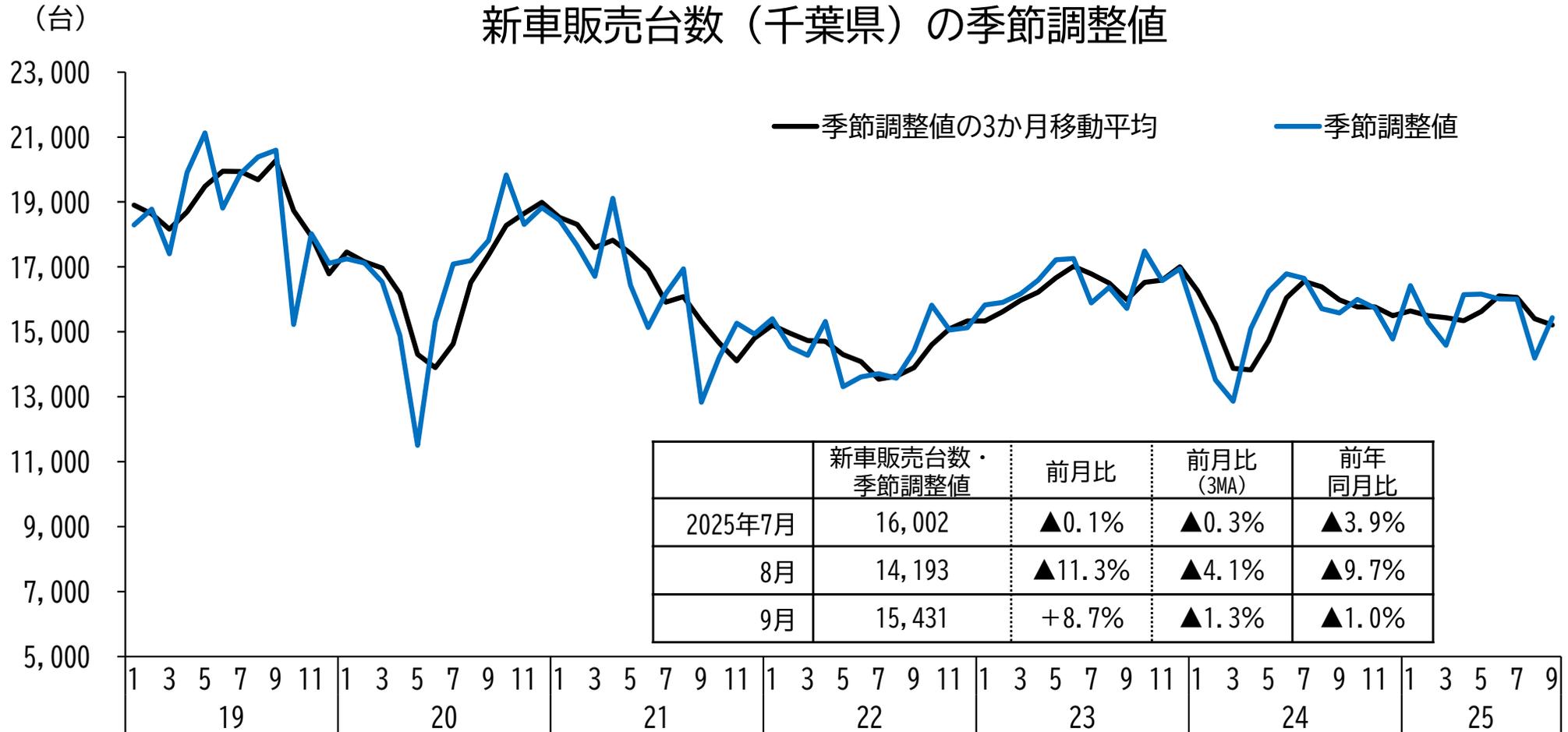
※4 3MAとは、後方3か月移動平均値。

（資料）総務省「家計調査」「消費者物価指数」

「新車販売台数」

- 高額な耐久消費財の代表格である新車販売台数について、9月は前月比+8.7%と増加。後方3か月移動平均は同▲1.3%と減少。前年同月比は▲1.0%と減少。

新車販売台数（千葉県）の季節調整値



※1 新車販売台数は、軽自動車を含む。

※2 季節調整は、経済政策課作成。

※3 3MAとは、後方3か月移動平均値。

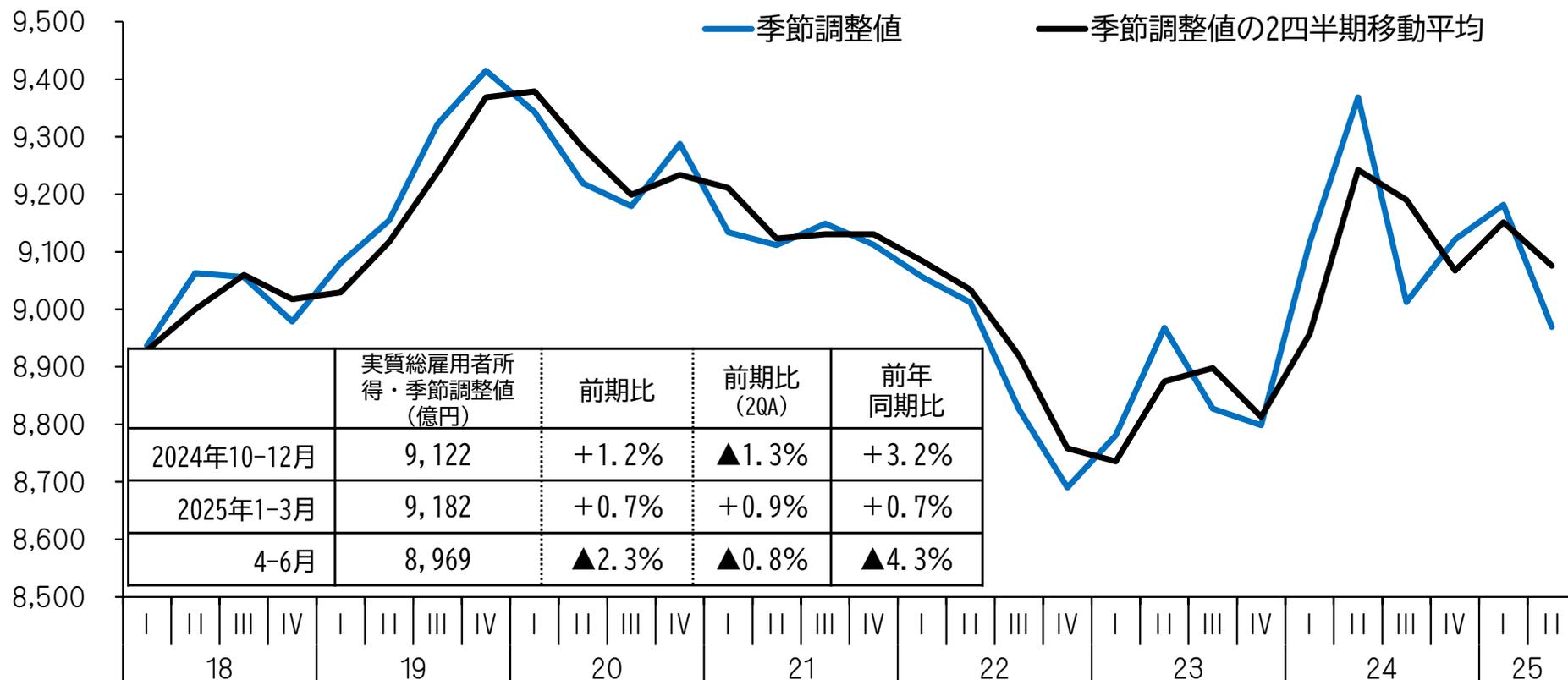
(資料) (一社) 全国軽自動車協会連合会「軽四輪車県別新車販売台数」、(一社) 日本自動車販売協会連合会千葉県支部「新車販売台数概況」

「実質総雇用者所得」

消費を下支えする実質総雇用者所得（千葉県）について、2025年4-6月期は前期比▲2.3%と減少。2四半期移動平均は同▲0.8%と減少。前年同期比は▲4.3%と減少。

実質総雇用者所得（千葉県）の季節調整値

（億円、2020年物価基準）



※1 実質総雇用者所得 = (雇用者数) × (一人当たり現金給与総額) × [100 ÷ (消費者物価指数 (帰属家賃を除く総合、2020年=100))] と
して算出。なお、千葉県の雇用者数は公表値がないため、下式により試算した値。

雇用者数 = (就業者数) × (南関東の就業者数対雇用者比率)。

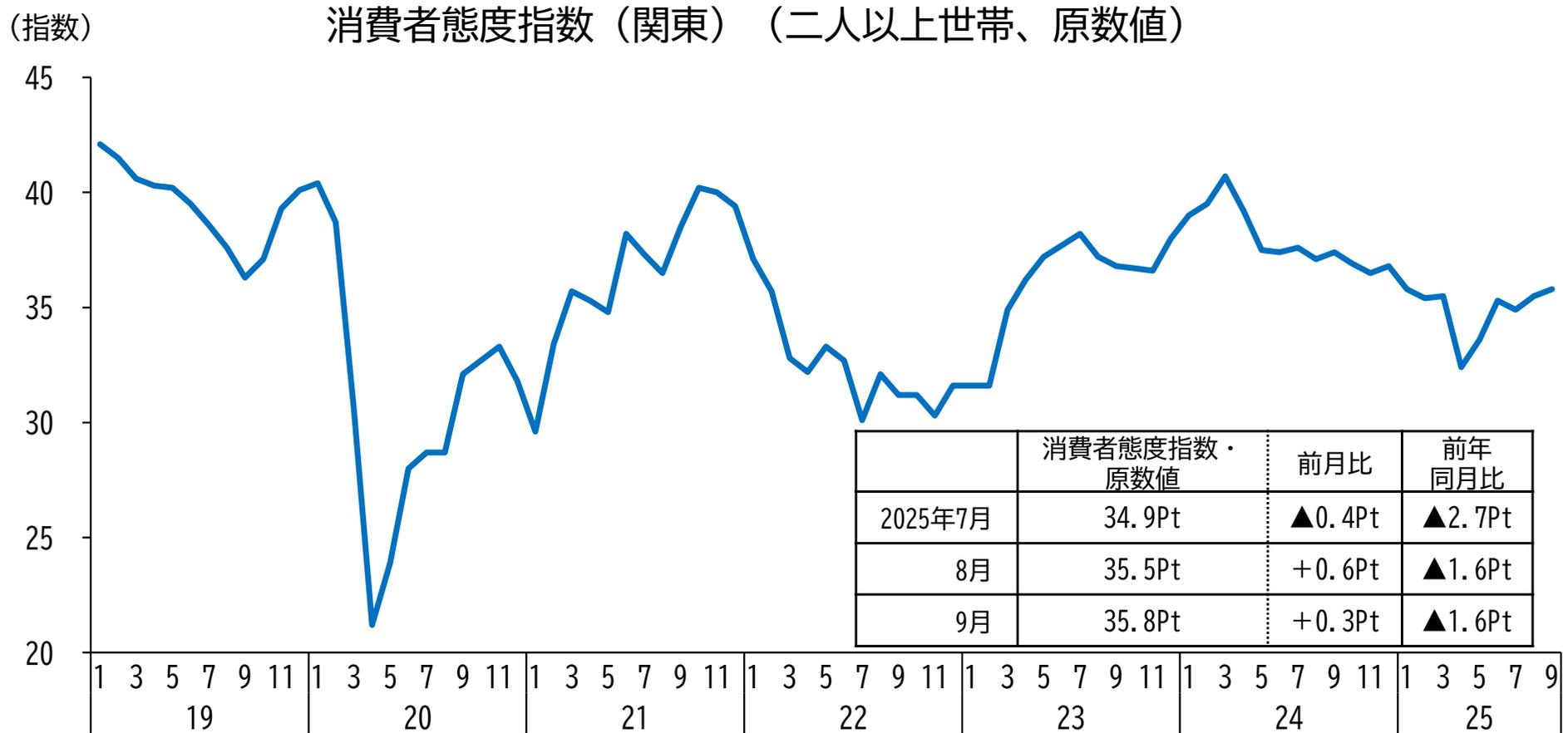
※2 季節調整は、経済政策課作成。

※3 2QAとは、後方2四半期移動平均値。

(資料) 総務省「労働力調査」「消費者物価指数」、千葉県「毎月勤労統計調査」

「消費者態度指数」

- 消費者マインドを示す消費者態度指数は、9月は35.8ポイントと前月から+0.3ポイントの増加。前年同月比からは、1.6ポイントの減少。

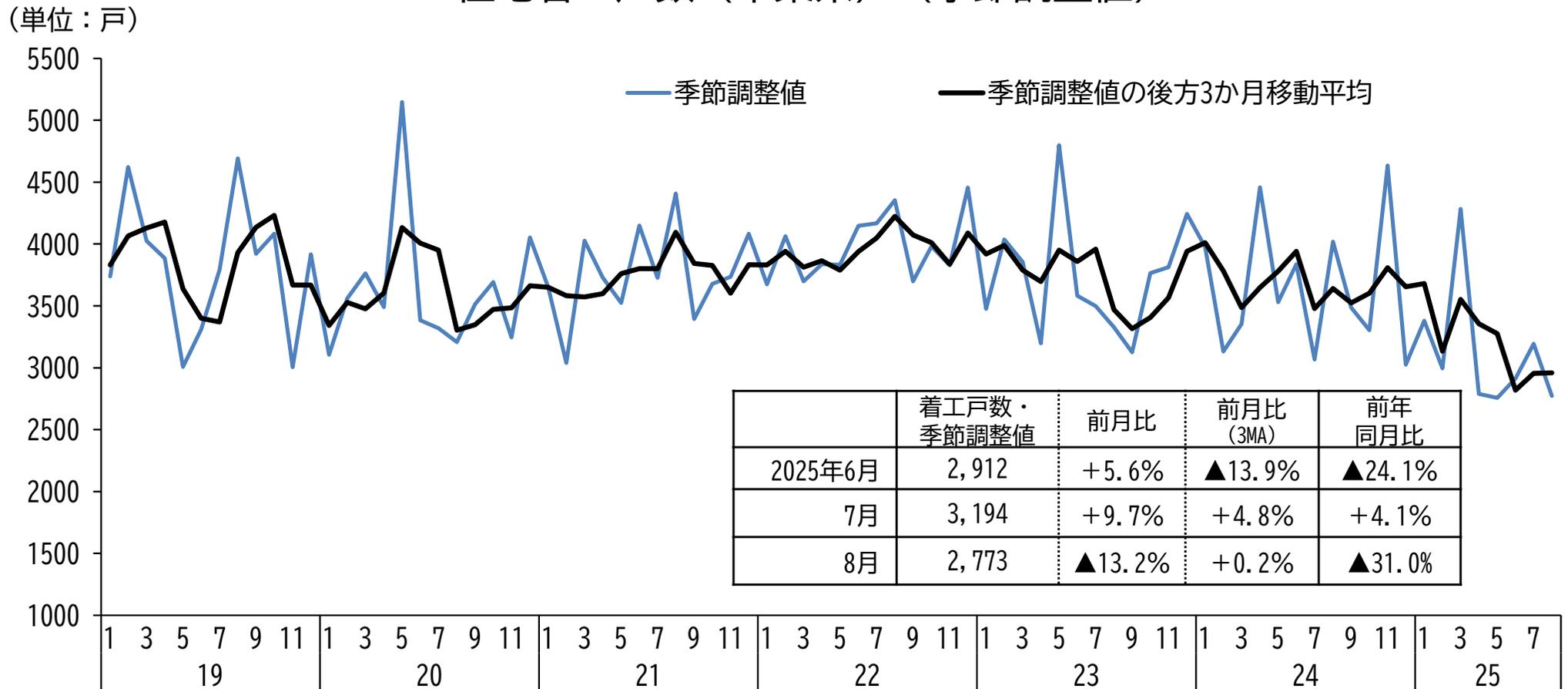


消費者態度指数は、「暮らし向き」「収入の増え方」「雇用環境」「耐久消費財の買い時判断」に関して、標本世帯に今後半年間の見通しを調査し、指数化したもの。個人消費に対して先行して動くことが多い特徴がある。



□ 8月の新設住宅着工戸数は、前月比と▲13.2%と減少。後方3か月移動平均は+0.2%と増加。前年同月比は▲31.0%と減少。

住宅着工戸数（千葉県）（季節調整値）



※ 季節調整は、経済政策課作成。

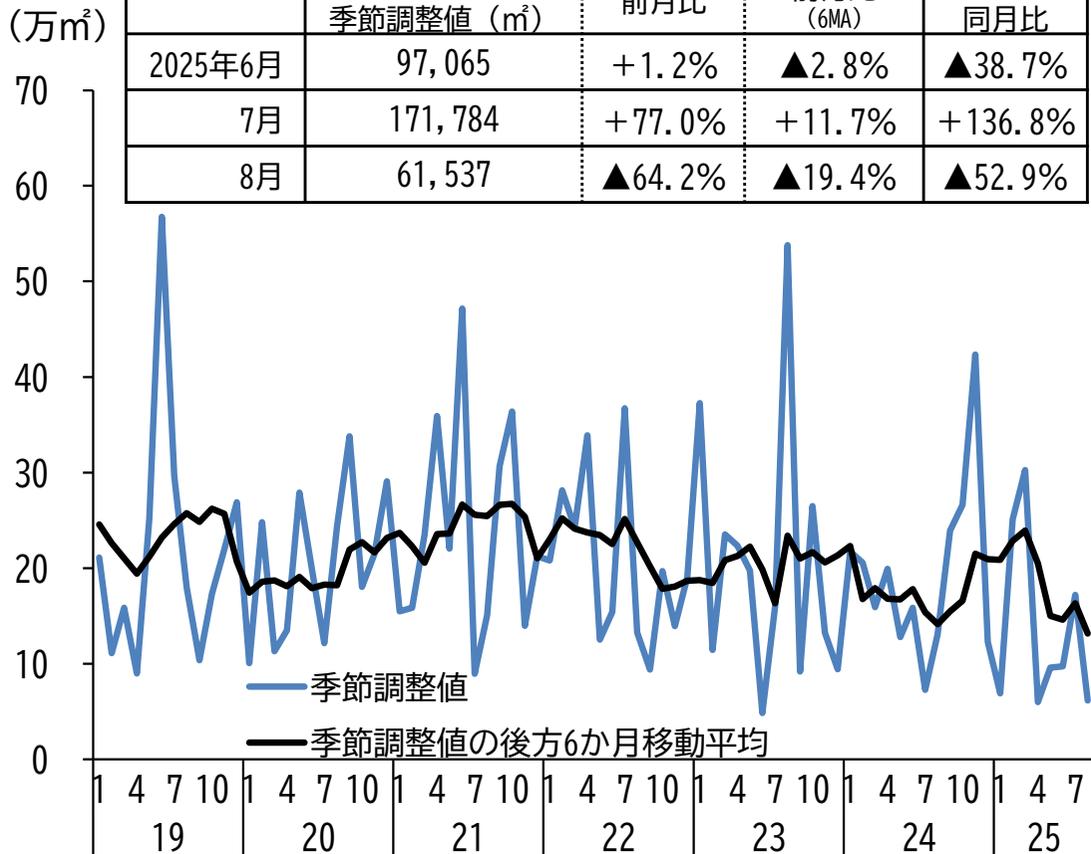
(資料) 国土交通省「住宅着工統計」

設備投資 ～弱含んでいる～ 前月からの判断変更 ➡

- ❑ 建築物への投資を把握できる着工床面積について、8月は前月比▲64.2%と減少。6か月移動平均は同▲19.4%と減少。前年同月比は▲52.9%と減少。
- ❑ 2025年度の設備投資計画は、2025年9月調査時点で前年度比▲34.3%となっている。

建築着工床面積・非居住用（千葉県）の 季節調整値（※1）

	着工床面積・ 季節調整値（㎡）	前月比	前月比 （6MA）	前年 同月比
2025年6月	97,065	+1.2%	▲2.8%	▲38.7%
7月	171,784	+77.0%	+11.7%	+136.8%
8月	61,537	▲64.2%	▲19.4%	▲52.9%

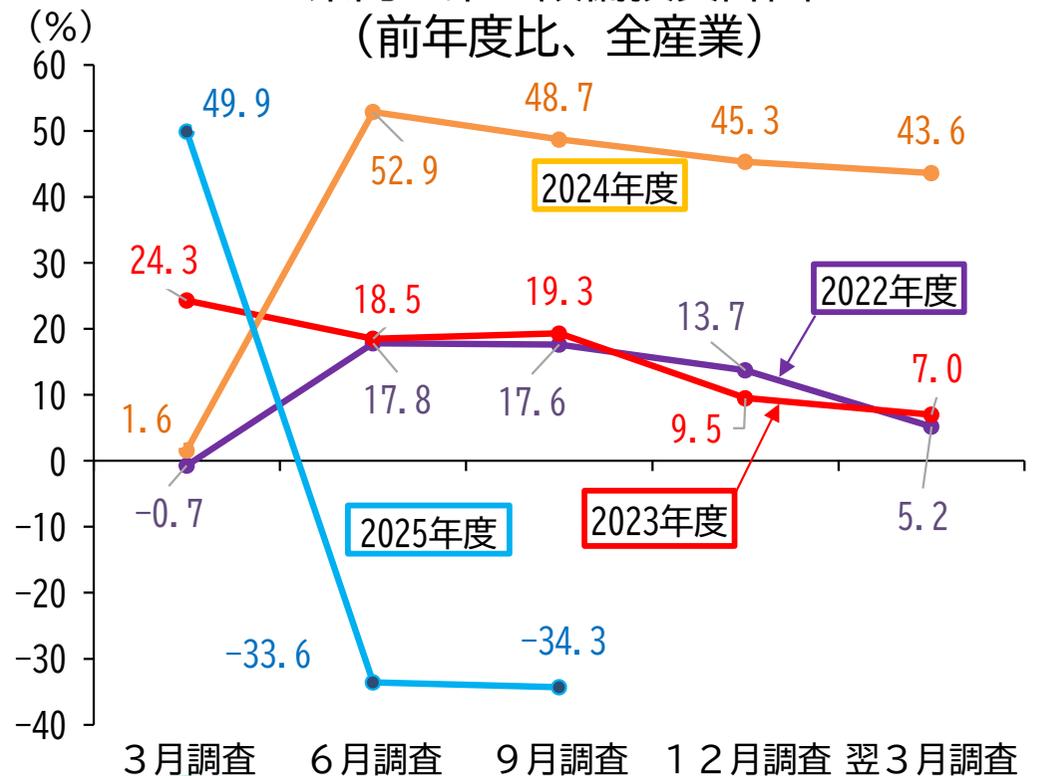


※1 季節調整は、経済政策課作成。

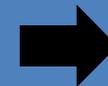
※2 6MAとは、後方6か月移動平均値。

（資料）国土交通省「建築着工統計」、財務省関東財務局千葉財務事務所「法人企業景気予測調査」

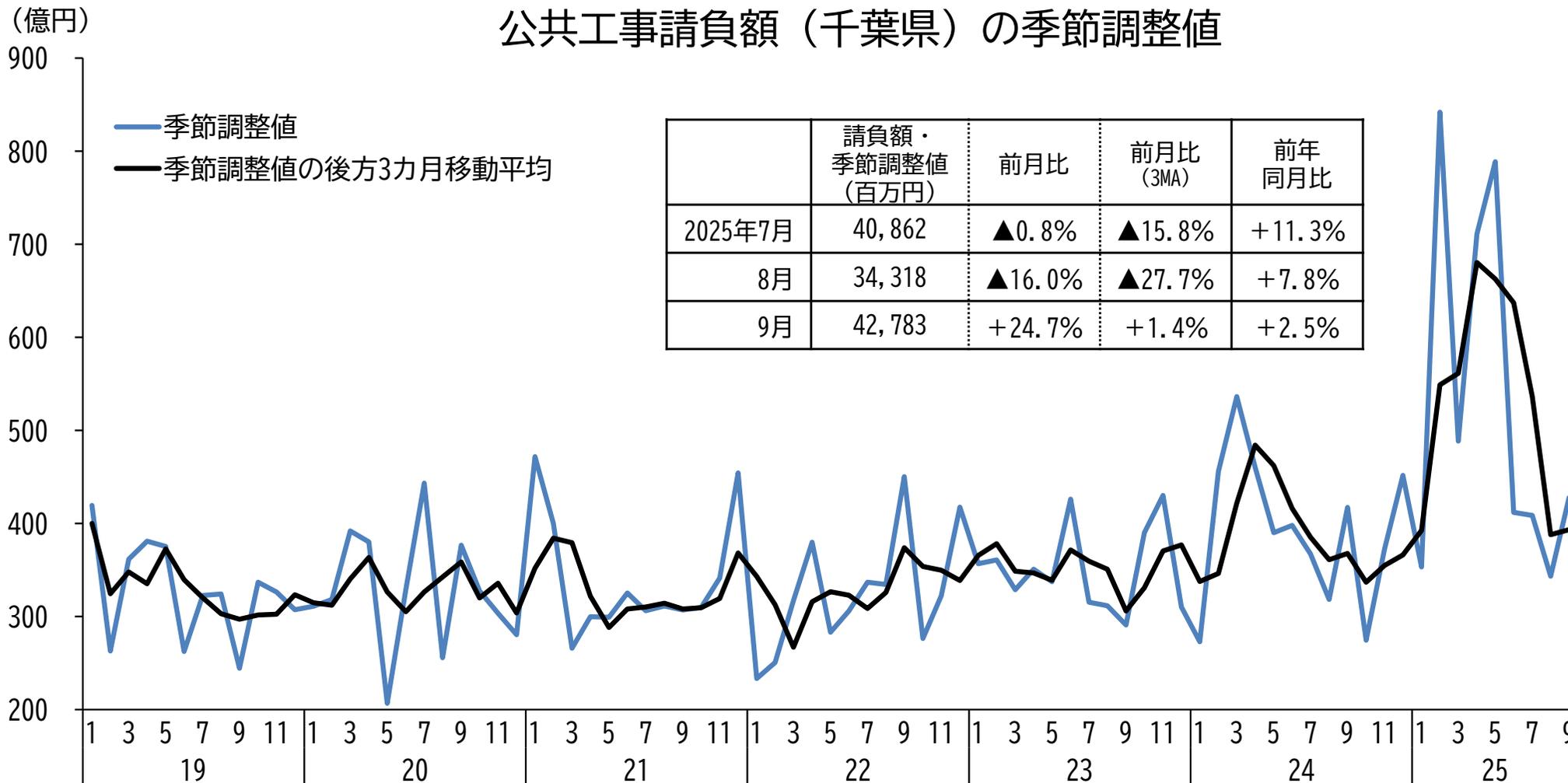
県内企業の設備投資計画 （前年度比、全産業）



設備投資には、大きく「機械設備投資」「建築物投資」「ソフトウェア投資」が存在する。このうち、建築着工床面積・非居住用は「建築物投資」の動向を把握できる。なお、建築主が国等の建築物も含まれることに、留意が必要。



□ 9月の公共工事請負額は、前月比+24.7%と増加した。3か月移動平均は同+1.4%と増加。前年同月比は+2.5%と増加。



※1 季節調整は、経済政策課作成。

※2 3MAとは、後方3か月移動平均値。

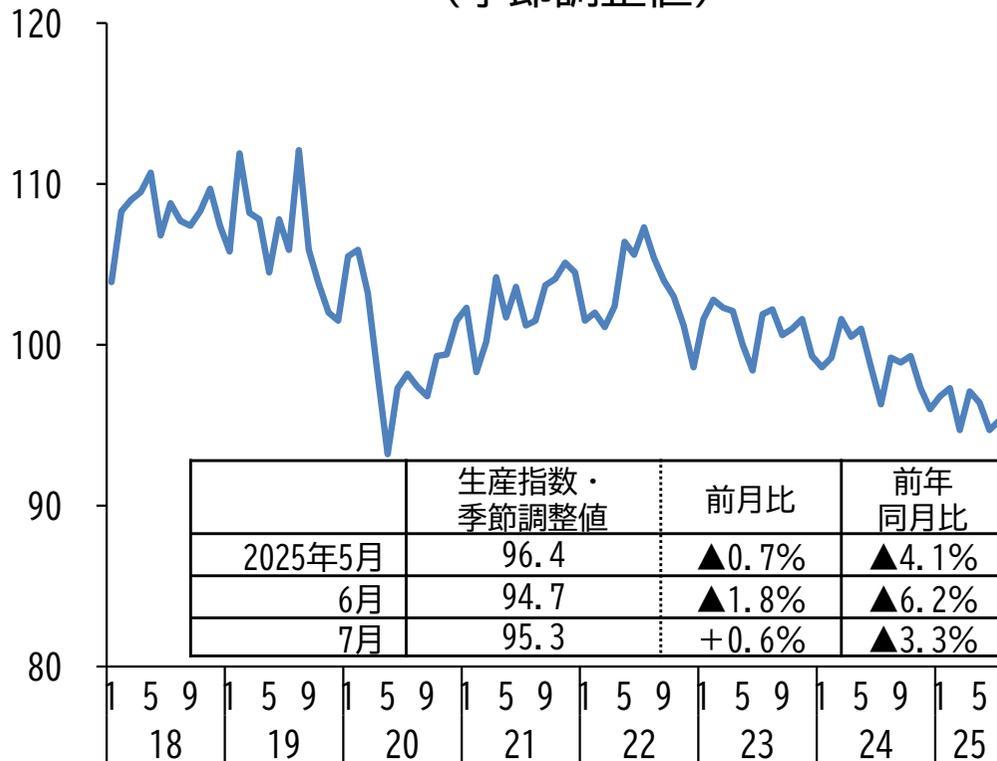
(資料) 東日本建設業保証株式会社「公共工事前払金保証統計」



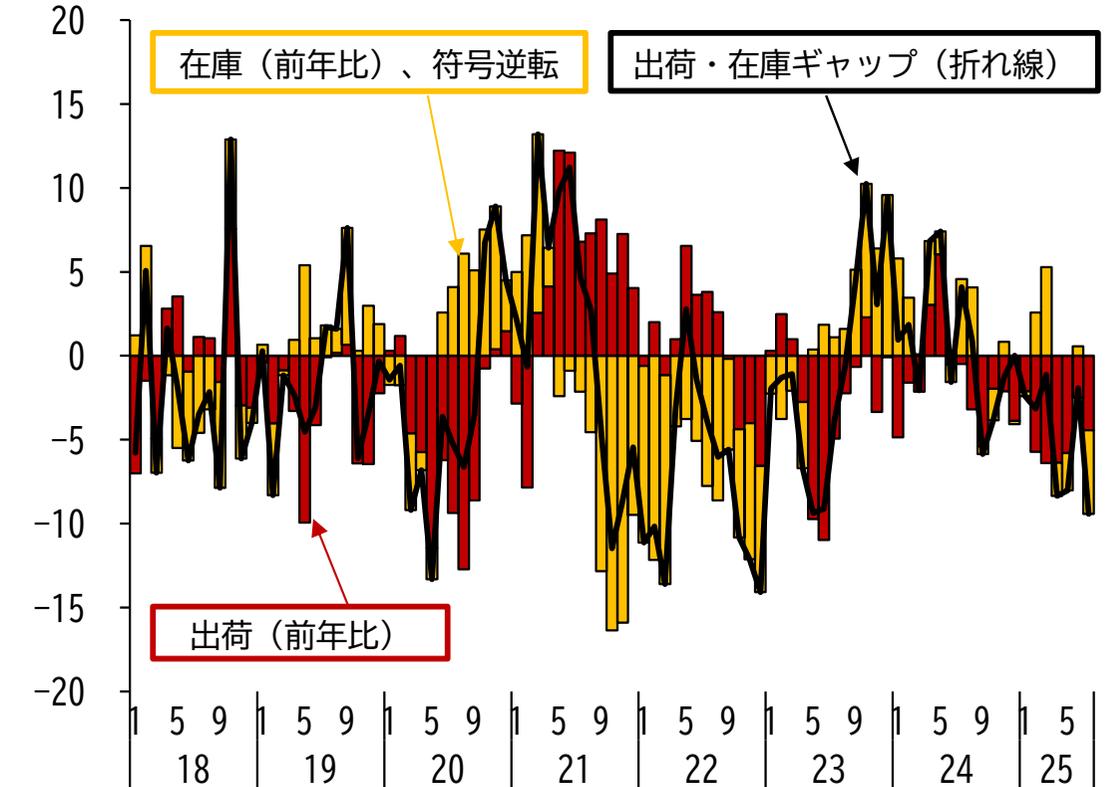
- 7月の鈇工業生産指数（季節調整値）は、前月比+0.6%と増加。前年同月比は▲3.3%と減少。
- 前月比の業種別動向は、電気・情報通信機械工業が+22.3%、その他工業が+13.5%の上昇、汎用・業務用機械工業が▲13.7%、石油・石炭製品工業が▲9.1%の低下となっている。
- 出荷・在庫ギャップはマイナス（在庫調整・在庫積み上がり局面）。

(2020年=100)

鈇工業生産指数（千葉県） （季節調整値）



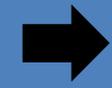
出荷・在庫ギャップ（千葉県）



※出荷・在庫ギャップ=出荷（原数値の前年同月比）-在庫（原数値の前年同月比）。出荷・在庫ギャップ（%ポイント）がプラスであれば、「在庫積み増し局面」を示し前向きな動きと判断できる。マイナスであれば、「在庫調整・在庫積み上がり局面」を示し後ろ向きの動きと判断できる。

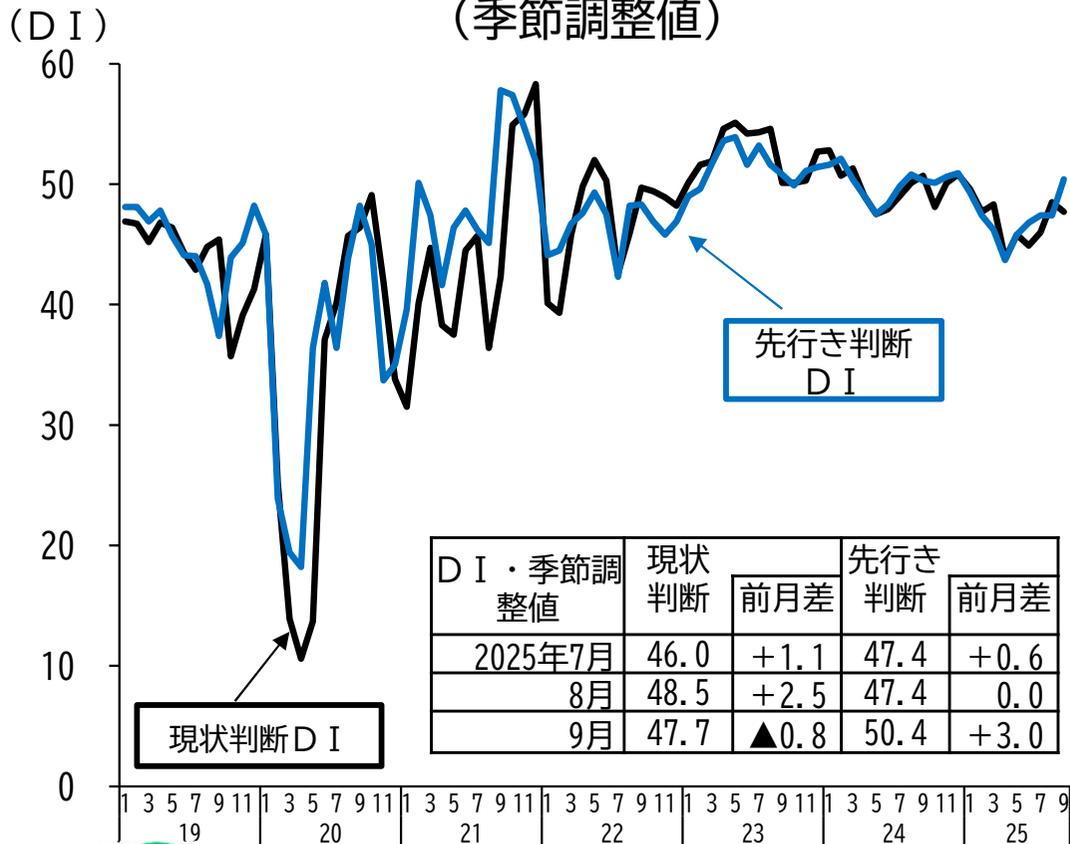
（資料）千葉県「鈇工業指数」

企業景況感 ～改善の動きに弱さがみられる。～ 前月からの判断変更



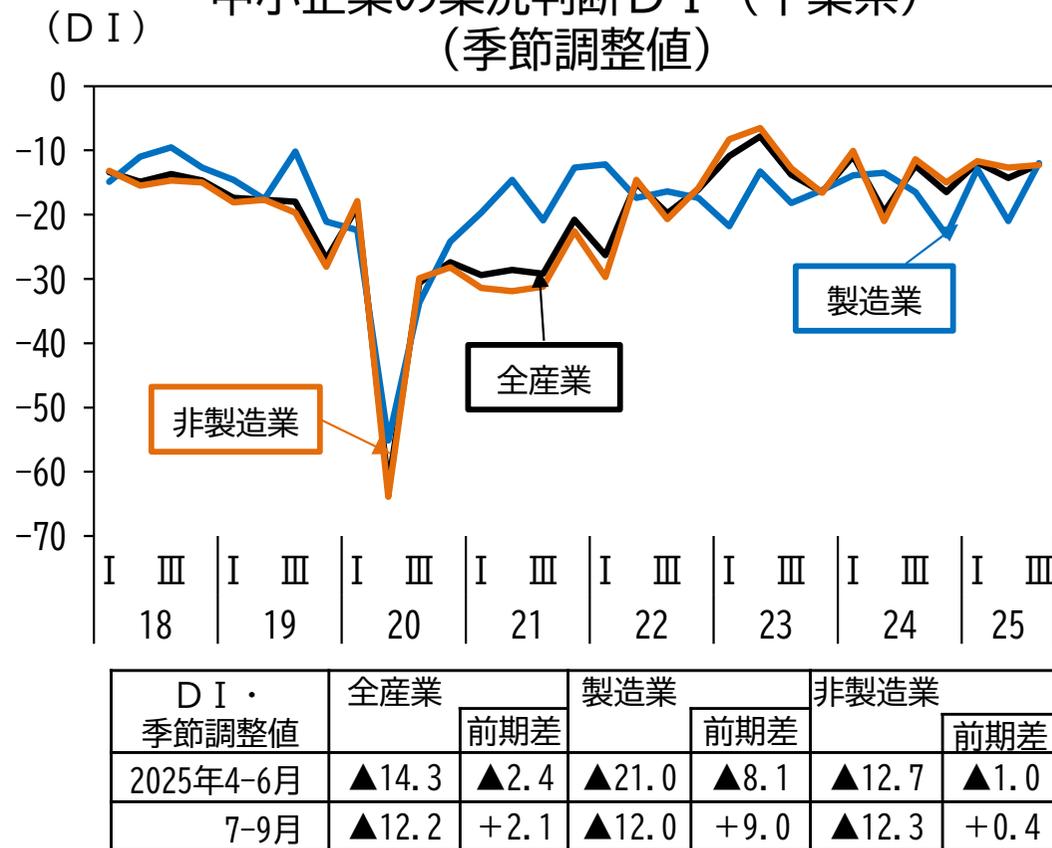
- 働く人に景気の実感を聞く景気ウォッチャー調査（9月）の現状判断は、前月差▲0.8ポイントと悪化し、先行き判断は、+3.0ポイントと改善した。
- 中小企業（全産業）の業況判断D I（季節調整値）は、2025年7-9月期は前期差+2.1ポイントと改善。

景気ウォッチャー調査（南関東） （季節調整値）



景気ウォッチャー調査は、「今月の身の回りの景気は3か月前と比べて良くなっているか」「今後2～3か月先の身の回りの景気は今月と比べて良くなるか」を調査し、指数化したもの。改善と悪化が拮抗した場合はD I値50となる。

中小企業の業況判断D I（千葉県） （季節調整値）

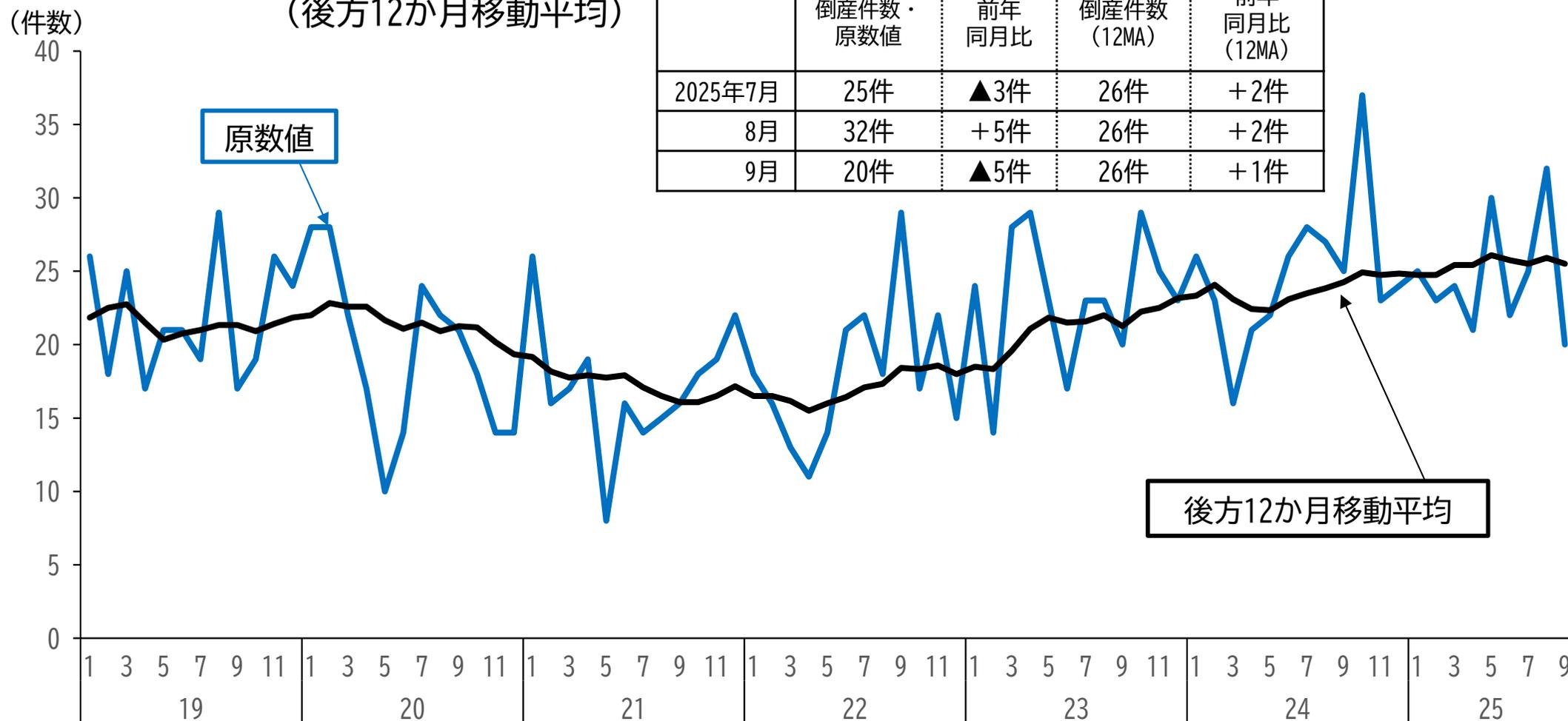


業況判断D Iは、経営者へのヒアリングをベースとし、前期比で「好転」と回答した企業比率から、「悪化」と回答した企業比率を引いて、指数化したもの。好転と悪化が拮抗した場合はD I値0となる。

「倒産件数」～このところ増加がみられる～

□ 9月の倒産件数（後方12か月移動平均）は、前年同月と比較して1件増加した。

倒産件数（千葉県）
（後方12か月移動平均）



※12MAとは、後方12か月移動平均値。

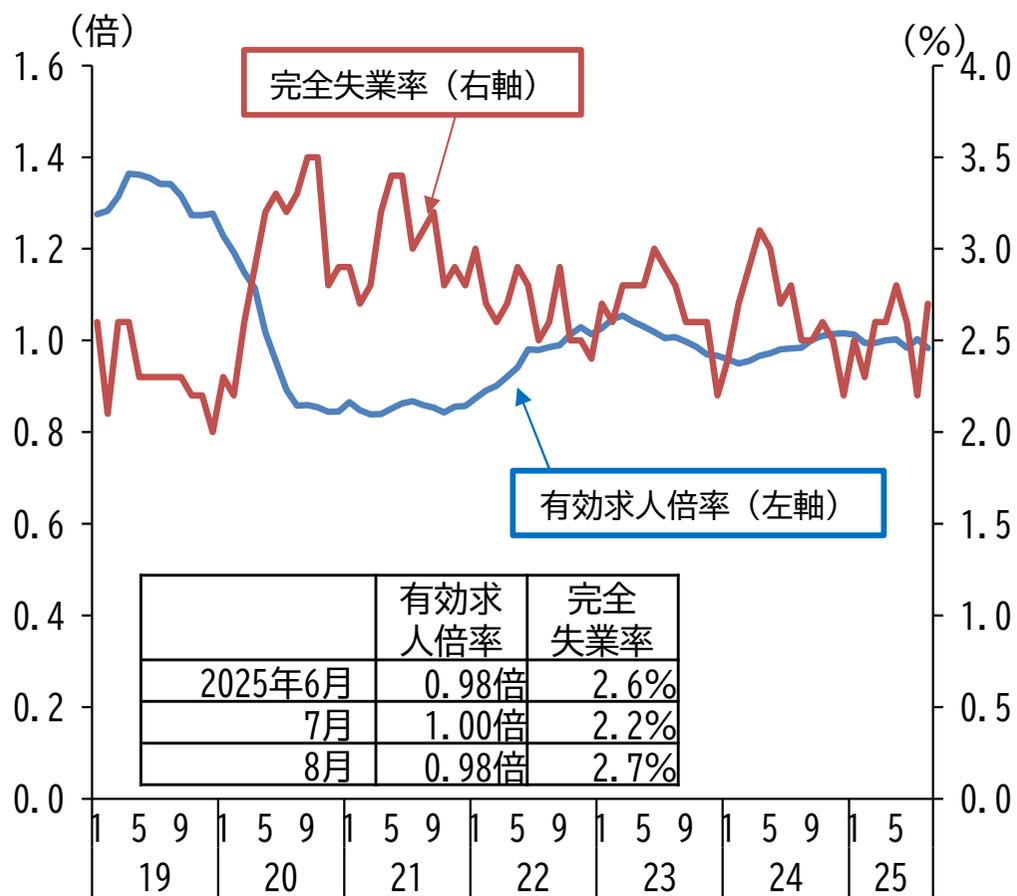
（資料）株式会社東京商工リサーチ千葉支店「千葉県内企業倒産状況」

雇用情勢 ～持ち直しつつある～ 前月からの判断変更

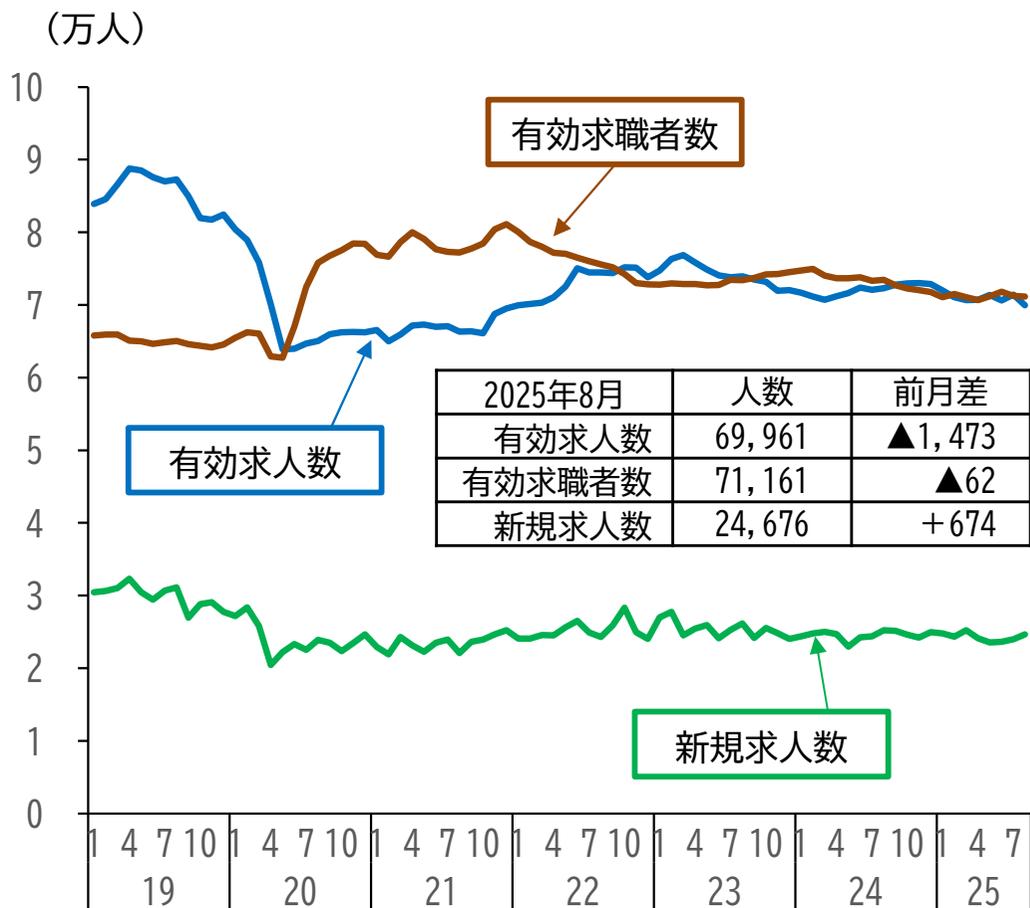


- 8月の有効求人倍率は、0.98倍と前月から0.02ポイントの悪化。8月の完全失業率は、2.7%と前月より悪化した。
- 有効求人数と有効求職者数は減少したが、新規求人数は増加した。

有効求人倍率（千葉県、季節調整値）と完全失業率（南関東、原数値）



有効求職者数、有効求人数、新規求人数（千葉県）（季節調整値）



※1 有効求人倍率＝月間有効求人数÷月間有効求職者数。なお、新規求人数は有効求人数（または有効求人倍率）の先行指標。

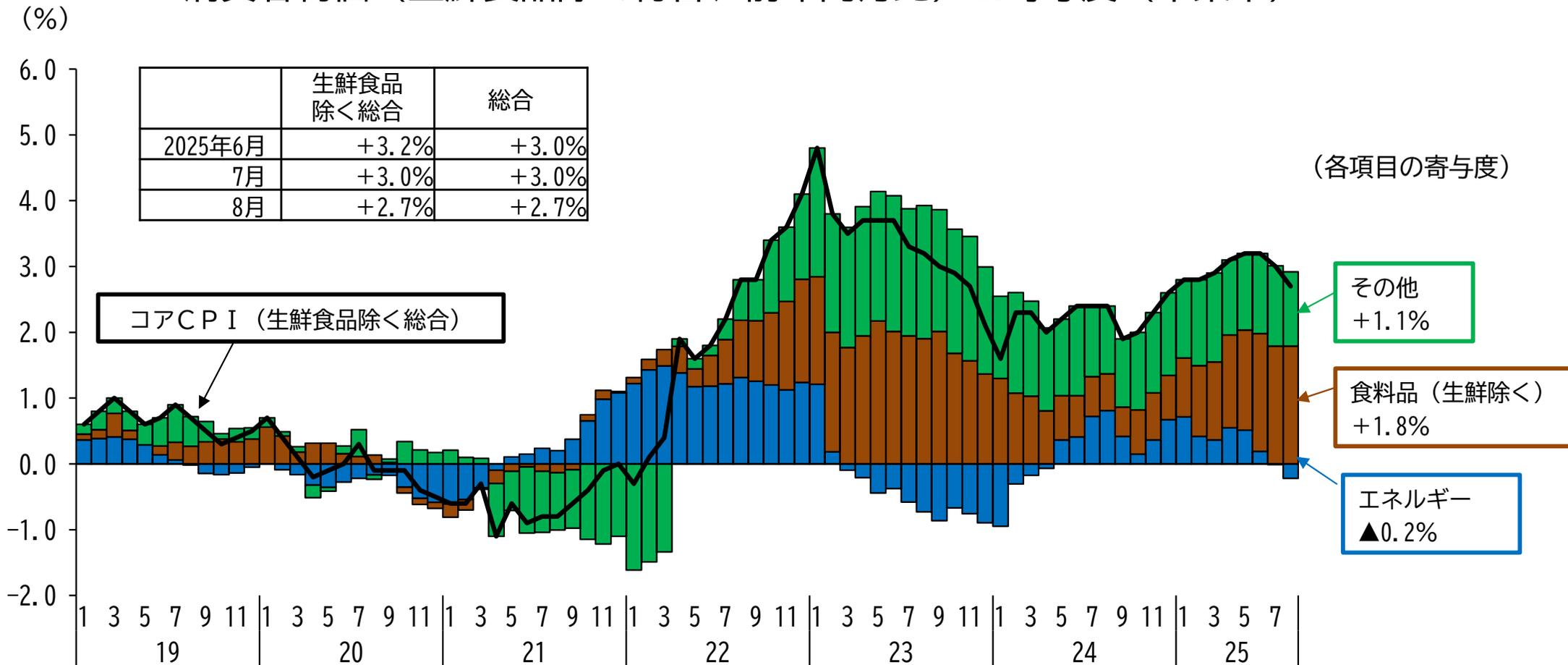
※2 求職票・求人票の有効期限は、申込日の翌々月末まで。

（資料）総務省「労働力調査」、厚生労働省「職業安定業務統計」

「消費者物価」 ～上昇している～

□ 8月の消費者物価（生鮮食品除く総合）（コアCPI）は、前年同月比+2.7%。

消費者物価（生鮮食品除く総合、前年同月比）と寄与度（千葉市）



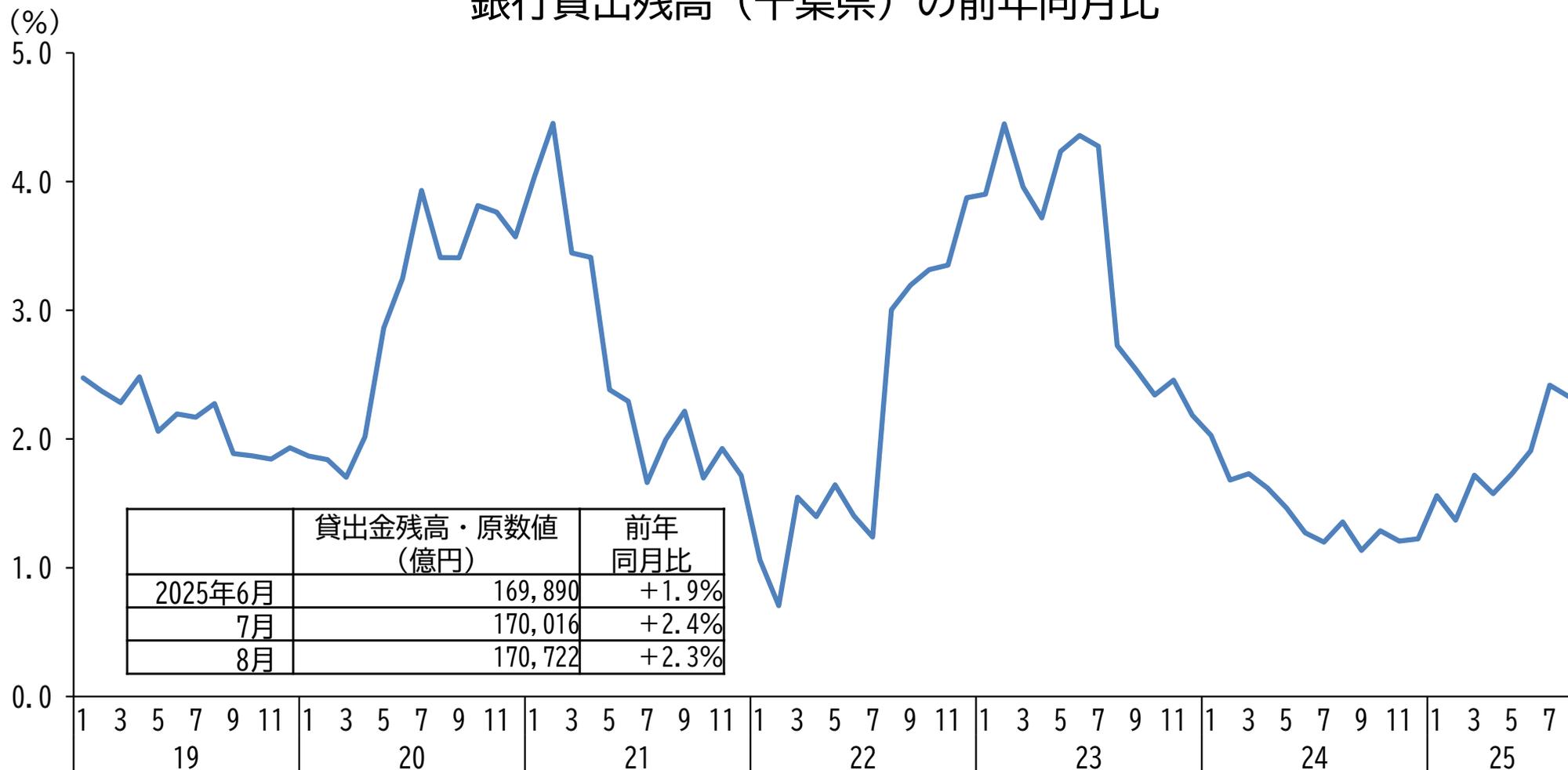
※寄与度 = (各項目の前年同月比) × (各項目のウェイト) ÷ (生鮮食品除く総合のウェイト)。

（資料）総務省「消費者物価指数」

「金融」 ～銀行貸出は、増加している～

□ 8月の銀行貸出残高は、前年同月比+2.3%と増加している。

銀行貸出残高（千葉県）の前年同月比



(資料) 日本銀行「都道府県別預金・現金・貸出金」

内閣府「月例経済報告（令和7年10月）」

財務省千葉財務事務所

「県内経済情勢（令和7年7月判断）」

	9月月例	10月月例
基調判断	景気は、米国の通商政策による影響が自動車産業を中心にみられるものの、緩やかに回復している。 先行きについては、雇用・所得環境の改善や各種政策の効果が緩やかな回復を支えることが期待されるが、米国の通商政策の影響による景気の下振れリスクには留意が必要である。加えて、物価上昇の継続が消費者マインドの下振れ等を通じて個人消費に及ぼす影響なども、我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、金融資本市場の変動等の影響に引き続き注意する必要がある。	景気は、米国の通商政策による影響が自動車産業を中心にみられるものの、緩やかに回復している。 先行きについては、雇用・所得環境の改善や各種政策の効果が緩やかな回復を支えることが期待されるが、米国の通商政策の影響による景気の下振れリスクには留意が必要である。加えて、物価上昇の継続が消費者マインドの下振れ等を通じて個人消費に及ぼす影響なども、我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、金融資本市場の変動等の影響に引き続き注意する必要がある。
政策態度	米国の関税措置について、7月22日の日米間の合意を踏まえ、引き続き必要な対応を行いながら、経済財政運営に万全を期す。「経済財政運営と改革の基本方針2025～『今日より明日はよくなる』と実感できる社会へ』に基づいて、「買上げと投資が牽引する成長型経済」を実現していく。 このため、「国民の安心・安全と持続的な成長に向けた総合経済対策～全ての世代の現在・将来の賃金・所得を増やす～」及びその裏付けとなる令和6年度補正予算並びに令和7年度予算を迅速かつ着実に執行するとともに、4月25日に取りまとめた「米国関税措置を受けた緊急対応パッケージ」の施策を実施する。 日本銀行は、9月19日、保有するETFおよびJ-REITについて市場への売却を行うことを決定した。 政府と日本銀行は、引き続き緊密に連携し、経済・物価動向に応じて機動的な政策運営を行っていく。 日本銀行には、経済・物価・金融情勢に応じて適切な金融政策運営を行うことにより、賃金と物価の好循環を確認しつつ、2%の物価安定目標を持続的・安定的に実現することを期待する。	政府は、「経済あつての財政」を基本とし、「責任ある積極財政」の考え方の下、戦略的に財政出動を行うことで「強い経済」を構築する。 今の国民の暮らしを守る物価高対策を早急に講じるとともに、日本経済の強さを取り戻すため、生活の安全保障・物価高への対応、危機管理投資・成長投資による強い経済の実現、防衛力と外交力の強化を柱とした「総合経済対策」を早急に策定する。 政府と日本銀行は、引き続き緊密に連携し、経済・物価動向に応じて機動的な政策運営を行っていく。 日本銀行には、経済・物価・金融情勢に応じて適切な金融政策運営を行うことにより、賃金と物価の好循環を確認しつつ、2%の物価安定目標を持続的・安定的に実現することを期待する。

【総括判断】「県内経済は、持ち直している」

項目	前回（7年4月判断）	今回（7年7月判断）	前回比較
総括判断	持ち直している	持ち直している	➡

(注) 7年7月判断は、前回7年4月判断以降、足下の状況までを含めた期間で判断している。

【判断の要点】

個人消費は、緩やかに回復しつつある。生産活動は、一進一退の状況にある。雇用情勢は、緩やかに持ち直しつつある。

【各項目の判断】

項目	前回（7年4月判断）	今回（7年7月判断）	前回比較
個人消費	緩やかに回復しつつある	緩やかに回復しつつある	➡
生産活動	持ち直しに向けたテンポが緩やかになっている	一進一退の状況にある	➡
雇用情勢	緩やかに持ち直しつつある	緩やかに持ち直しつつある	➡
設備投資	6年度は増加見込みとなっている	7年度は減少見込みとなっている	➡
企業収益	6年度は増益見込みとなっている	7年度は減益見込みとなっている	➡
企業の景況感	「下降」超となっている	「下降」超となっている	➡
住宅建設	前年を下回っている	前年を下回っている	➡
公共事業	前年を上回っている	前年を上回っている	➡

【先行き】

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあつて、持ち直していくことが期待される。ただし、物価上昇の継続、米国の通商政策、金融資本市場の変動等の影響に注意する必要がある。

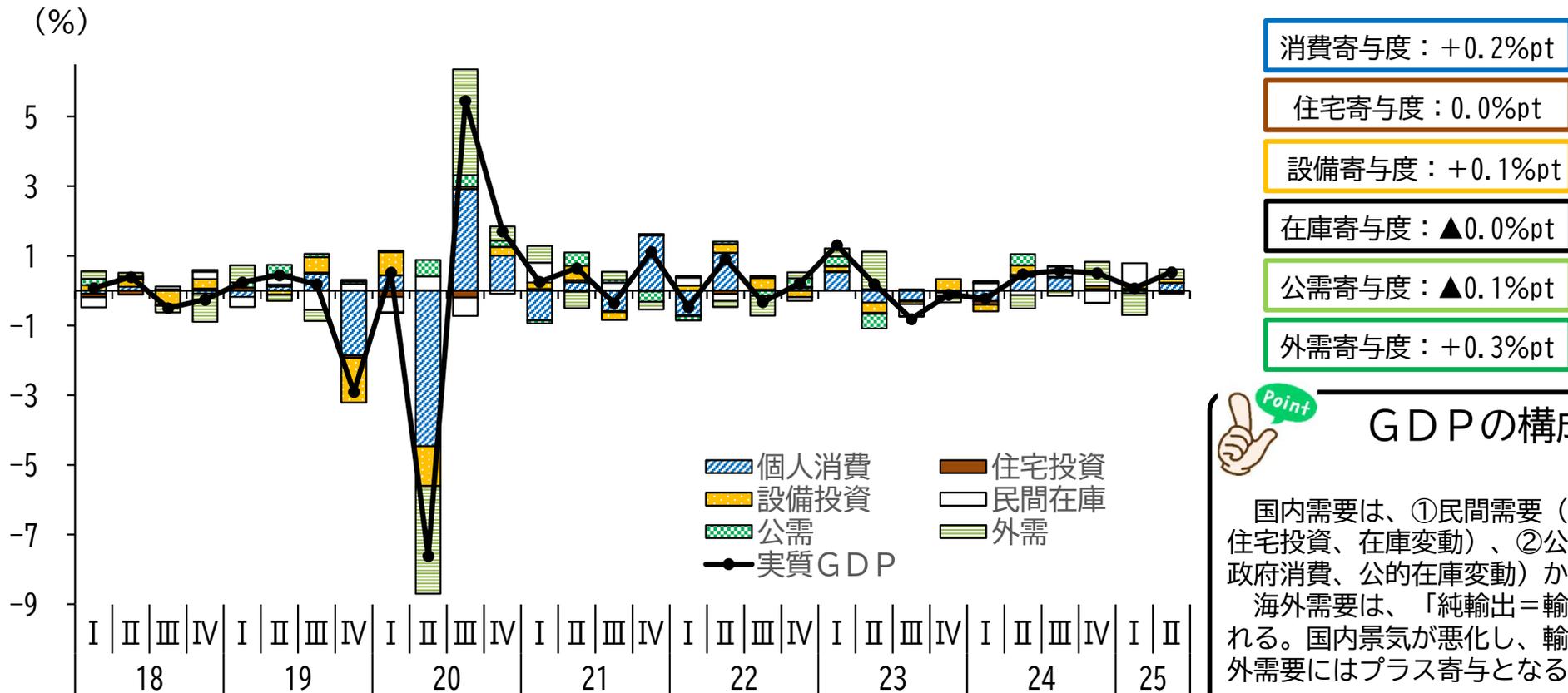
	9月月例	10月月例
個人消費	持ち直しの動きがみられる	持ち直しの動きがみられる
設備投資	緩やかに持ち直している	緩やかに持ち直している
住宅建設	建築物省エネ法等改正に伴う駆け込み需要の反動もあり、このところ弱含んでいる	このところ弱含んでいる
公共投資	堅調に推移している	堅調に推移している
輸出	おおむね横ばいとなっている	おおむね横ばいとなっている
輸入	持ち直しの動きがみられる	持ち直しの動きがみられる
貿易・サービス収支	赤字となっている	赤字となっている
生産	横ばいとなっている	横ばいとなっている
企業収益	米国の通商政策による影響が自動車産業を中心にみられる中で、改善に足踏みがみられる	米国の通商政策による影響が自動車産業を中心にみられる中で、改善に足踏みがみられる
業況判断	おおむね横ばいとなっている	おおむね横ばいとなっている
倒産件数	おおむね横ばいとなっている	このところ増加がみられる
雇用情勢	改善の動きがみられる	改善の動きがみられる
国内企業物価	このところ横ばいとなっている	このところ横ばいとなっている
消費者物価	上昇している	上昇している

(注) 下線部は先月から変更した部分。

(参考) 2025年4 - 6月期GDP (2次速報)

- 実質GDP成長率（季節調整済）は、前期比+0.5%（年率+2.2%）となった。
- 内訳をみると、国内需要（内需）は前期比寄与度+0.2%ptとプラス寄与、海外需要（外需）は前期比寄与度+0.3%ptとプラス寄与となった。
- 内需項目では、設備投資等がプラス寄与となった。

実質GDP成長率（前期比）の寄与度



Point

GDPの構成項目

国内需要は、①民間需要（個人消費、設備投資、住宅投資、在庫変動）、②公的需要（公共投資、政府消費、公的在庫変動）から構成される。

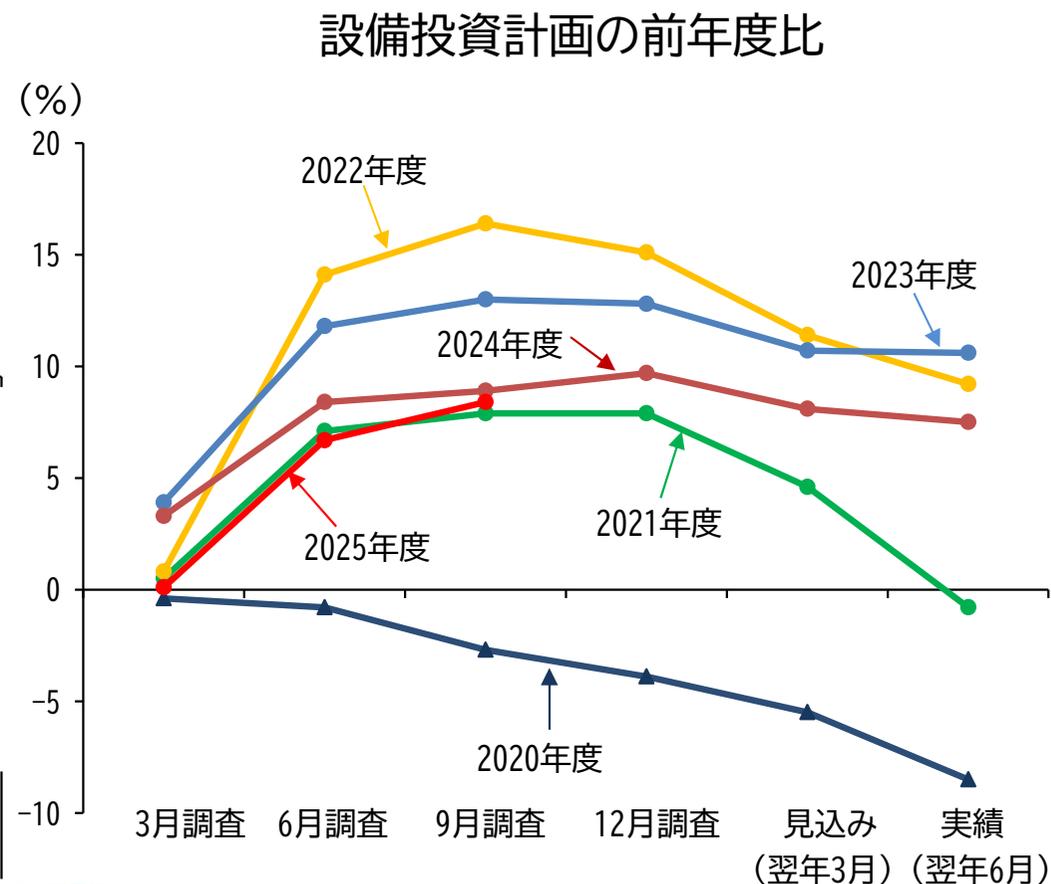
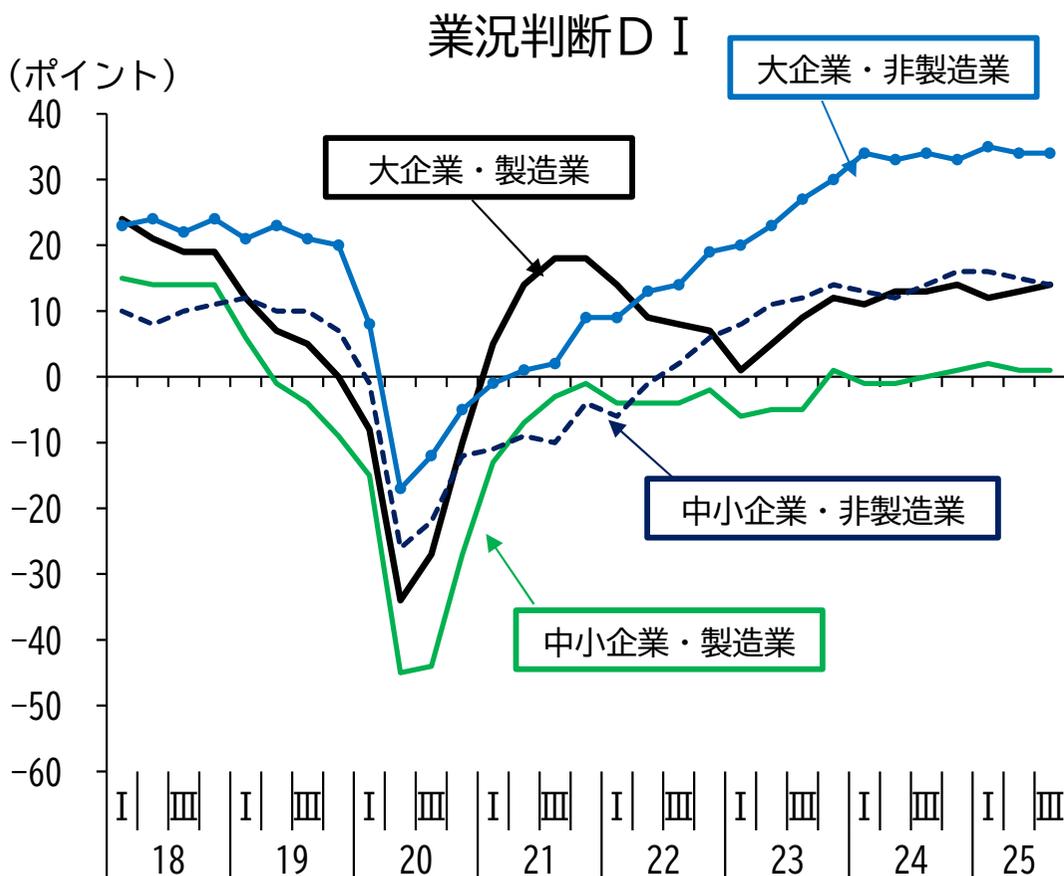
海外需要は、「純輸出＝輸出－輸入」で構成される。国内景気が悪化し、輸入が減少すると、海外需要にはプラス寄与となることに注意が必要。

※四半期別GDPは、四半期終了の1か月半後頃に1次速報として、2か月半後頃に2次速報として、公表される。2次速報は、1次速報時点では不足していた基礎統計を反映したものであり、特に「設備投資」の数値が1次速報値から変動する傾向がある。

(資料) 内閣府「四半期別GDP速報」

(参考) 日銀短観による全国企業の動向

- ❑ 業況判断D I（2025年9月調査）は、大企業・中小企業ともにプラスとなっている。
- ❑ 設備投資計画（全規模・全産業）は、2025年度9月調査は前年度比+8.4%となった。



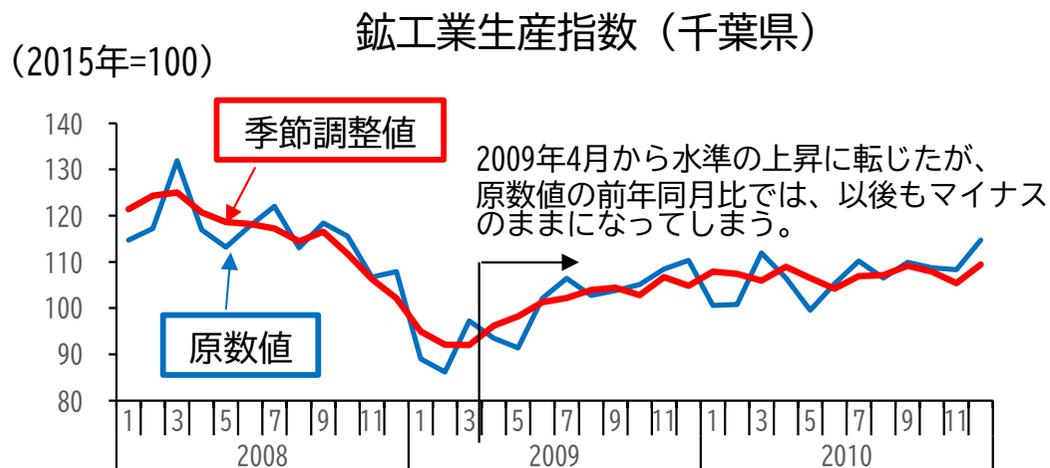
Point 業況判断D Iは、民間企業への調査をベースとし、会社の業況が「良い」と回答した企業比率から、「悪い」と回答した企業比率を引いて、指数化したもの。「良い」と「悪い」が拮抗した場合はD I値0となる。

Point 設備投資計画は、特に中小企業で事前に策定していない企業が多く、投資時点で設備投資額に計上されるため、翌年3月調査まで上方修正され、その後の実績で下方修正される傾向がある。修正されることを織り込んで判断する必要がある。



指標をよみとく手法

- ✓指標の動きは、原則として「季節調整値」の前月比でつかむ
- ✓「季節調整値」がない場合、「原数値」の前年同月比の変化幅でつかむ。



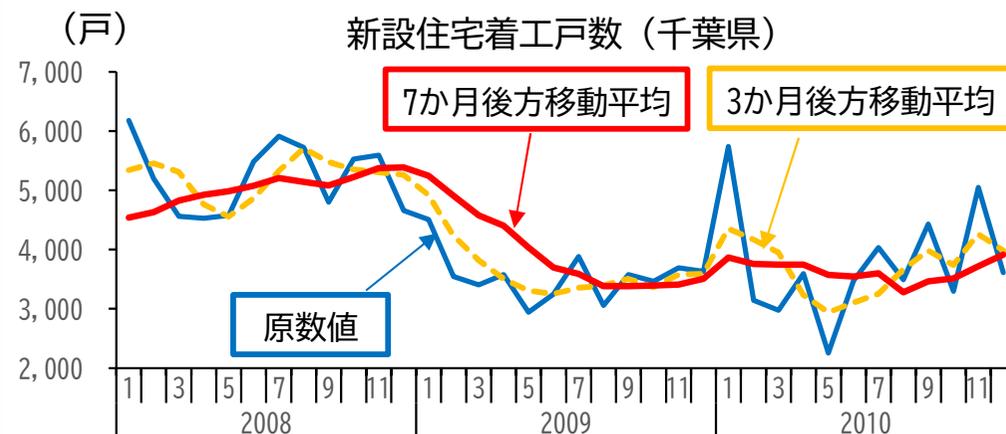
指標の原数値には、稼働日数やイベントなど季節変動があるので、単純に前月比をみることはできない。統計的手法により季節変動を取り除いた「季節調整値」であれば、「前月比」で足元の指標の動きを迅速に把握できる。

季節調整値の公表がない指標は、「原数値」の「前年同月比」で、季節性を除くことができる。ただし、前年との比較になるため、足元の指標の動きを迅速に把握できない。そこで、前年同月比の変化幅（※上図で原数値の前年同月比をみると、2009年5月▲19.3%、6月▲13.3%であり、変化幅+5.9%pt。改善と評価できる）で足元の指標の動きを把握する。



後方移動平均

- ✓数値の変動が激しい指標は、後方移動平均値で、傾向をつかむ



移動平均とは、単月の数値だけでなく、複数月の数値の平均値を算出することで、数値変動を滑らかにして傾向を把握する手法。

(例) 2008年12月の3か月後方移動平均

$$= (10\text{月値} + 11\text{月値} + 12\text{月値}) \div 3$$



実質と名目

- ✓一部指標は物価変動の影響を除く「実質値」で、傾向をつかむ

物価上昇により名目値（取引される金額）が増えても、経済実態は改善していない場合がある。一部指標は、価格水準を固定した実質値（取引される量）の動きで傾向を把握する。

実質値の伸び率 = (名目値の伸び率) - (物価上昇率)